

留学生の命 日米結び半世紀

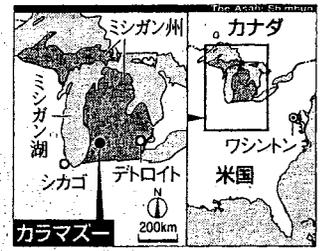


49年前の8月、ひとりの女子学生が留学先の米国で交通事故死した。その死を悼んだ現地の人々によって日本人留學生のための奨学金制度が作られた。それから半世紀、国を超えて結ばれたきずなは今も受け継がれている。

事故死悼み奨学金 89人に

先月、東京の老舗洋菓子店「村上開新堂」店主、山本道子さん(66)は米ミシガン州カラマズーを訪ねた。ウエスタンミシガン大学(WMU)にある姉、村上由希子さん(写真)の記念碑に献花し、その碑を見守り続けてくれる人々にお礼を言うためだった。

姉の由希子さんは、慶応大学経済学部4年だった1962年6月、65人の同期生と共に、WMUでの短期留学に旅立った。カラマズーは当時人口8万人の静かで美しい町だった。由希子さんは留學生生活を克明に日記や家族への手紙につづった。「午前中は英会話、午後は講義、サマータイトムで朝8時半から授業です」(6月26日)。「バスで二組に分かれてピクニックに行きました。その後、二、三の家庭を見て回りまして。とても合理的に出来ていて



妹「町に愛された姉 感謝の気持ち実った」

クに追突し、積み荷の鉄棒が最前列で外の景色を撮影していた由希子さんを直撃した。由希子さんは即死。21歳だった。遺族の希望で遺体は現地で火葬された。WMU学校報にはカラマズーの人たちが多数参列し、市長がラジオを通じて追悼の言葉を贈った。

「由希子はカラマズーの町にお嫁にやりました」と気丈に振る舞う母寿味さんの元にパウソン夫妻から何通もの手紙が届いた。「ユキは私たちが知る最も美しい花でした。神様が私たちにこの美しい花を送ってくれたことに感謝し、そしてその命をあまりにも早く取り上げられたことを悲しんでいます」翌63年3月、夫妻からうれし

い知らせが来た。「WMUがユキを記念する奨学金制度を創設しました。私たちは彼女をいつまでも覚えていきます」市民やWMU学生自治会が中心となって基金を作り、この年から、毎年慶応大生1人を奨学料、寮費、食費免除で受け入れ

由希子さんの記念碑の前で追悼式が行われた。ウエスタンミシガン大学、山本道子さん提供

る村上由希子奨学制度が始まった。10年後には両大のプログラムとなり、慶応大でもWMU学生の受け入れが始まった。交流事業を担ったWMUの首我道敏・物理学名誉教授(86)は「本校初の日本留学制度でした。村上奨学金は日米交流の大変重要な出発点です」と話す。今年奨学生は慶応大50人、WMU 39人になる。

90年に由希子さんの同期生らが「慶応WMU会」を作った。初代会長の北川幸彦さん(74)は事故後、病院に駆けつけた一人。「卒業後はずっと仕事に追われ、当時は振り返るようになっていたのはそのころでした」その後、立教、立命館、城西など他大学のWMU留學生らが加わって「カラマズー会」と名称を変え、5年前にWMUにできた日本文化研究拠点「曾我ジャパンセンター」への寄付や交流を続けている。会長の大嶋英二さん(63)は69年奨学生。「人生で大きなチャンスをもたらした。恩返しです」という。今月17日の命日を前に、半世紀ぶりにWMUを訪ねた妹の道子さんは語る。「ジャパセンタールができ、すばらしい研究者が青っているのに感激しました。この町の人に愛され、感謝した姉の気持ちが種となり、こんなに立派な木に成長したかと。50回忌ですが、新たな出発をした50回目の誕生日だと思えます」(伊佐恭子)